希望のバトン

名古屋大学医学部附属病院 総合周産期母子医療センター 新生児部門 上田一仁

「私たちは星を動かすようなもんだ。…もし人のいのちを救ってその人の人生を変えたなら、もしかしたら歴史だって変わるかもしれないだろう？」(『ブラック・ジャック』『ある老婆の思い出』より)

高校の頃、この言葉に出会った私は、今、大学病院のNICUでちいさないのちを助ける毎日を送っています。同時に新生児医療の診療・研究だけでなく、小児緩和ケア研修会のファシリテーター、中学生や高校生への「いのちの授業」、そして国際学会のシンポジストやワークショップ運営など、いろいろなことに携わらせてもらっています。

「なぜ新生児医療と小児緩和ケアなのですか？」とよく訊かれますが、振り返ると一つ一つの出会いのバトンが、自分の「今」に繋がっています。

医学生の時、英国で知り会った community paediatrician の A 先生。いつも笑顔を絶やさず、在宅医療や緩和ケアが必要な子どもたちをコミュニティの中で支える包容力は今も忘れられません。A 先生から感じた『「こどもが生きる」ことを支える』大切さは、今も自分の歩みを照らしています。

最初の研修病院で出会い、自分の師となった新生児科の K 先生。どんなとき、どんな状況でも赤ちゃんやこどもの力を信じて治療を尽くすその情熱は、いまだ遙かな目標です。そして K 先生からいただいた『「^{なす}救きたい」と思うのなら、「^{なす}救けられない」ということも学びなさい』

という言葉は、「^{なす}救けられないとき、治せないときでも、私たち医療者には何ができるのか」という問いとなり、小児緩和ケアという世界へ私を誘うこととなりました。

そして小児緩和ケアで巡り会い、様々な仕事をご一緒している Y 先生。背中を押していただいた共同研究が入り口となり、気がつけば国際学会のシンポジウムやワークショップの舞台に立つようになっていました。そして人と人とを繋げながら、こどもや家族を支える姿に接する度、「また前を向いて頑張ろう」という勇気が湧いてきます。同時に Y 先生の持つ“こどもへの温かなまなざし”は、自分の大きな憧れです。

A 先生、K 先生、Y 先生、そしてここでは書ききれなかった沢山の方から受け取ったバトンが、新生児医療と小児緩和ケアを軸にしながら、いろいろなフィールドで活動する今の自分に繋がっています。そしてこのバトンの意味を考えると、『「どんなときでも希望を紡ぐ」ということではないか』と感じるようになりました。

もとより、医師が患者さんや家族の人生の全ての責任を担うことはできません。それでもなお、患者さんと人生が交わるその一瞬だけでも希望を見いだしたい。生と死が交錯する周産期医療だからこそ、ささやかでも希望を紡いでいきたい。そんなことを思いながら、自分がいただいたバトンを次の誰かに渡そうと、今日もちいさないのちと向き合っています。

[著者略歴] 上田 一仁 (うへだ かずと)

愛媛県出身

2009年 名古屋大学医学部卒業 公立陶生病院 (初期研修、小児科)

2013年 名古屋大学医学部附属病院 小児科

2014年 半田市立半田病院 (知多半島総合医療センター) 小児科

2015年 安城更生病院 小児科

2016年 名古屋大学医学部附属病院 総合周産期母子医療センター 新生児部門

2024年 名古屋大学大学院 医学博士取得

小児科専門医、医学博士、小児緩和ケア研修会ファシリテーター

2020年、Japan Pediatric Society (JPS)/SPR Fellows' Exchange Award 受賞。

2024年、第23回アジアオセアニア周産期学会 (FAOPS2024) で Young Investigator Award を受賞。さらに同学会で開催された国際シンポジウムに招聘される。

新生児医療と小児緩和ケアを軸としながら、診療や研究、国内外での講演、そして中学生・高校生への「いのちの授業」など、幅広く活動しています。自分を導いてくださった方々、そして患者さんやご家族から教えていただいたことを大切にしながら、一歩ずつ進んでいきたいと思っています。

～DEI 推進委員会より～

人生の師に巡り合うためには

人生の師とは、進路に迷ったときや、夢をあきらめかけたときに、進むべき道をそっと照らしてくれる存在です。そして、そのような師には、誰もがきっと巡り合うことができます。若い頃には、国内外の著名な施設に憧れを抱くことも多いでしょう。しかし本エッセイは、真に自身のキャリアを左右するような「人生の師 (ロールモデル)」の存在に気づくことができるかどうかは、自分自身の感性次第であるという、ある意味で当たり前のようであり、実はとても大切な真理を私たちに伝えてくれているように感じます。

一方、指導医の立場からこのエッセイを読むと、登場する“師”の姿を通して、多忙な日常診療のなかでも、若手がふと口にした言葉に耳を傾け、自身の信念をしっかりと伝えていく姿勢の大切さに、改めて気づかされます。中堅以上になると、若手の育成に悩みを感じることもあるかもしれません。そんなときには、このエッセイのように、次の世代へ「希望のバトン」をつないでいるのだということに、思いを向けたいものです。バトンを受け取る側も、渡す側も、それぞれの人生の中で、その瞬間の輝きをきっと実感できるはずです。

責任編集

DEI 推進委員会